

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	動詞の格支配について : 現代ギリシア語を例として
Author(s)	関本, 至
Citation	ニダバ , 1 : 45 - 47
Issue Date	1972-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044680
Right	
Relation	



動詞の格支配について

— 現代ギリシア語を例として —

関 本 至

現代ギリシアのある小説を読んでいたら、次のような二つの表現に出くわした。(以下、ギリシア文字はラテン文字に transliterate する。)

- (1) Thá tó mátho ná paízei mé tá phídhia, ... (「蛇と遊ぶことを
(私は)彼に教えよう」)
- (2) Toú émathan ná tylígei tá phídhia stó laimó tou, ...
(「蛇をその首に巻きつけることを(彼らは)彼に教えた」)

アンダーラインを引いた動詞は、(1)では未来形(一人称単数)、(2)ではアオリスト形(三人称複数)であるが、いずれも mathaíno 「教える」の変化形である。(mathaíno は古代語および純正語の mantháno に当たり、現代語では「学ぶ」のほか「学ばす」すなわち「教える」(= dhidhásko)の意味でも使われる)。且つ ná 以下は英語の that clause にほぼ相当し、上記の二文はいずれも「彼に……することを教える」という同じ型の構文でできている。しかるに、(1)では「彼に」(実はここではある少年[中性名詞]のことである)が tó となり、(2)では tou となっている。この tó は人称代名詞(中性の弱形)の対格であり、tou は属格である。

現代ギリシア語は、古代語の5つの格を4つの格に減じた、すなわち古代語の与格が消失したのである。その古代語の5格も実は共通印欧語の8格が縮減されたものだと言われる。つまり、共通印欧語の奪格、具格、位格が消失したのであって、それらの機能は属格や与格(さらには前置詞の使用)によって補われた(syncretism である)。そして古代ギリシア語からさらに失われた与格の機能は、近代ギリシア語では属格と対格(あるいは前置詞の使用)によって代行されている。

誰々に言う(légho), 誰々に答える(apantó), 誰々に与える(dhíno)などの「誰々に」は古代語では与格で示されたが、現代語の場合には、代名詞ならば“属格”(例: tou apantó 「彼に答える」)、名詞ならば“前置詞 sé + 名詞対格形”(例: dhíno stó paidhí éna vivlio 「子供に本を与える」)の形であらわされるのが普通である。

ところが *tóu dhíno* 「彼に与える」は現代ギリシアの北部方言では、*tón dhíno* のように人称代名詞の対格形で示される。方言によって *dhíno* のとる格が異なるのである。このちがいは現代ギリシア語における最も顕著な等語線の一つを形成している。

さて、はじめに述べたように、同一作者が同一作品の中で、しかもわずかな数行をへだてたところで動詞 *mathaíno* の間接目的語（「彼に」）を相異なる格（対格と属格）で示す例が見られたのであるが、*Mega Lexikon* で *mathaíno* の項をしらべると、やはり *tón émathe ná dhiavázei* 「読むことを彼に教えた」と *thá sou mátho egó* 「私はお前に教えよう」のように対格使用と属格使用の両例があげられている。動詞 *mathaíno* と結びつく代名詞の格は現代ギリシア語において対格と属格の両者の間を浮動していると言えるのである。またすでに述べた通り、*dhíno* の間接目的代名詞は方言によって属格を使用するところと対格を使用するところのちがいがあり、さらに古代語と現代語とでは、与格使用と属格使用の差異がみられる。

そもそも、ある動詞が、その（直接または間接の）目的語として、いかなる格をとるかは主としてその動詞の意味的性格と、当該言語の格（体系）の役割との双方に条件づけられるものであろうが、それは必ずしも単純な論理で説明できるようなものではない。（極論するならば本来どの格をとらなくてはならないというものではない）。それはむしろ話者（或は話す大衆）の「生活論理」ないし「言語的論理」とでも呼んで然るべきものに左右される。そしてそうした「言語的論理」（そのプリンスプルは多様である）によって成立した表現結合は凝固して *idiomatic* な（つまり没論理的な）ものともなり、時にはその凝固形は新しい「言語的論理」で解釈しなおされたり、あるいは解きほぐされて別個の新しい結合関係をとるに至ることもある。このことは単に動詞と格の問題に限らず言語現象の随所に見られるが、そのようないわば「言語揺動」の一端が上に掲げたギリシア語の場合にもかいまみることができるといえよう。

Summary

THE VERB AND THE CASE OF ITS OBJECT

The sentence "I teach him (to do something)" is expressed in Modern Greek by either of the following forms:

toú matháino ná ... (with genitive pronoun toú)
or tón matháino ná ... (with accusative pronoun tón).

The sentence "I give him (something)" is expressed in different ways in different dialects as follows:

toú dhíno ... (with genitive pronoun toú in Common Greek)
tón dhíno ... (with accusative pronoun tón in Northern dialects).

From the observation of the above-mentioned examples, the present writer treats of the fluctuation in the language expressions which may be explained by means of a) "linguistic logic" (=so to speak "non-logical logic", b) stereotyped forms and c) the re-interpretation of them.

Itaru SEKIMOTO